

● 発病したら

現在、エイズを発病しているのは、AさんやBさんのように、発病がきっかけでHIV感染が確認された人、発病寸前にHIV感染が確認された人、エイズ発病の前に感染が確認されたにも関わらず、通院・治療をしなかった人、だけです。治療の進歩により、今エイズを発病しても、9割ぐらいの人はAさんと同様、発病した感染症を治して無事退院できますが、Bさんのように後遺症を残す人も少なくありません。そして、まだ約1割の人がエイズ発病によってお亡くなりになります。

● 抗HIV薬による治療のメリット

抗HIV薬による治療を受けることの第一のメリットは、免疫機能を回復、維持することによって、エイズ発病を防止できることです。しかし、それ以外にも大きなメリットがあることが、最近わかってきました。HIV感染者は非感染者と比べて、エイズ発病以外にも様々な病気（癌や心筋梗塞、肝臓病、腎臓病など）の発生率が高くなる傾向があります。ところが、CD4細胞数がまだ十分ある時代から早期に治療を開始すれば、これらエイズ以外の病気の発生も減少します。治療を受ける第二のメリットは、このようなエイズ以外の合併症を減らすことができるという点にあります。

今後の治療はさらに進歩し、治療によるメリットはさらに多くなり、デメリットは少なくなっていくでしょう。HIV感染症は早期発見、早期治療開始がますます重要になっていくことと思われます。

我が国のHIV陽性者をめぐる福祉制度は、医療の進歩と歩調を合わせるように、1990年代後半に大幅に改善されました。その背景には、薬害エイズ訴訟で薬害被害者と国が和解する際に、薬害被害者は、感染経路に関わらず、HIVに感染したことにより免疫機能が低下した場合にそなえて福祉制度を充実するよう国に強く求め、国がこれに応えたということがあります。その結果、ビザを持たない外国籍の人たちなどを除き、HIV陽性者は身障者手帳を取得することができ、それに付随した数々の公的サービスが受けられるようになりました。

●医療費の自己負担と福祉制度

HIV感染症の治療を受ける場合には、紹介状を持参した場合に初診が8,000～10,000円、経過観察の時期の受診は、検査と診察代で6,000円程度であることが一般的です。抗HIV療法を開始した場合、いわゆる「お薬を飲む」場合には、健康保険だけでは月額60,000～70,000円程度の自己負担が必要となります。

身障者手帳を取得すれば、障害者の福祉サービスを受けられるようになります。医療費も軽減されます。所得によってかわりますが、おおそ月額2,500～20,000円の自己負担でHIV感染症についての医療が受けられるようになっています。

自治体によっては、さらに自己負担が軽減されるような制度があります。大阪ではBさんのような重度の障害（1級・2級）の場合には、1回500円の自己負担で医療が受けられます。また、エイズ発病などによりしばらく入院をしなければならないような場合には、国民健康保険以外の場合に「傷病手当金」という、病気やけがにより働けない間の給与を保障する制度が利用できます。

●健康保険を利用する場合

どこまで情報をコントロールできるか

HIV感染が分かると、職場や家族にそのことが知

られてしまうのではないかと不安を感じる人がいます。健康保険を利用して医療を受ける場合には、病名や検査内容、薬の種類などが明記された「レセプト」という請求書が、医療機関から健康保険組合に送られます。しかし健康保険組合には「健康保険法」という法律で守秘義務が定められており、会社に対しても報告してはならないことになっています。大企業で「〇〇会社健康保険組合」など自前の組織を持っている場合、職場の同僚が人事異動で出向く可能性があります。それ以外の会社であれば、「全国健康保険協会〇〇支部」や、「人材派遣健康保険組合」など複数の会社が参加している健康保険になり、会社と健康保険組合は完全に別組織となりますから、病名など細かな情報のやり取りは行われません。公務員の共済組合については、職場に「共済担当」の職員がいる場合がありますが、詳細については知らされないことが大半です。また、年に数回程度（健康保険組合により異なります）医療費の通知が届けられますが、病名が記載されることはありません。

●健康保険を持っていない場合

仕事を退職した後、健康保険加入の手続きをしていないなどの理由で、現在有効な健康保険を持っていない場合には、保険料や医療費の支払いを含め、生活費が賄えるのであれば、住所地の市役所（区役所）にて国民健康保険（75歳以上の場合は後期高齢者医療）加入の手続きをしてください。保険証発行までには数日の時間を要しますが、加入手続きの時点で、急ぎ医療機関に受診したい旨を伝え、当日から有効となれば、保険証発行を待たずに利用することができます。ただし、最長2年分は遡って保険料納付が必要です。保険料納付については分割や減額などそれぞれの市町村で相談が可能です。市町村によっては、健康保険の一部負担減免制度という、医療費の自己負担を軽減する制度が利用できる場合があります。

体調不良や就労先がないなどの理由で、生活自体

が困難であれば、居住地の市役所（区役所）で生活保護を申請することができます。どうしてもわからない場合には、まずは受診を希望するエイズ診療拠点病院の医療相談室に相談することができます。次の章の相談窓口も参照してください。

●何らかの後遺症により

介護が必要になる場合はどうか

エイズとは「HIV感染によって免疫力が低下したときに起こりやすい病気の総称」であり、日本では23の病気が指定されています。Bさんのように脳や神経に影響するような病気を発病した場合、脳卒中の後遺症と同じように、手足が自由に動かない、視野がおかしい、口がうまく動かない、物忘れがひどい、コミュニケーションが取れないなどの状態になることがあります。

障害者向けの福祉サービスも高齢者向けの福祉サービスも利用が可能ですが、現在のところ「HIV感染症」に不慣れなところが多く、たとえば脳卒中後の中年に比べて選択肢が限られることがあります。

●職場や家族との情報の共有について

HIV感染症は、感染したのち数年～10数年の間に徐々に免疫力が下がり、体が耐えられなくなり、身の回りに絶えずいるようなカビなどの病原体に負けてしまうことでエイズ発病となります。エイズを発病しても、多くの場合はそこから回復することが可能になりましたが、数週間から数カ月の入院や自宅療養を必要とすることがほとんどです。そうなれば、入院していることを職場に伝える他なく、また、家族にも知らせざるを得ない場合がほとんどです。職場に提出する診断書には、「HIV」や「エイズ」ではなく、できるだけ当たり障りのない病名を記載するよう主治医にお願いをすることができる場合もありますが、医師は虚偽を記載することが職業上できないため、「ウソにはならない」ギリギリの表現をしてもらうこととなります。病名を誰に告知するのかは本人が選択できる事柄ですが、命にかかわる場合や意思表示が困難な場合には、配偶

者や親・きょうだい・子どもの誰かに対して説明をする必要が生じます。

エイズかどうかわからないままに「体調が悪い」というだけで近くの医療機関に入院した場合は、エイズだとわかった時点で、専門病院に転院することが必要になります。どうして病院を移らなければならないのかを家族に説明する必要があるため、体調が最悪の状態であることを伝えざるを得なくなる場合があります。時には、本人より先に家族に説明がされてしまうこともあります。

伝えるか伝えないかは本人が選択できる範囲なのですが、前述のように言わざるを得ない状況になることがあります。また、性的な関係のあった人（性的パートナー）には感染の可能性があるため、性的パートナーに感染のことを伝えたくて検査を受けることを勧めるかどうかが、判断を迫られることがあります。

●病気とうまくつきあうには、どうしたらいいか

体調が悪くなる前に自発的に検査を受け、HIV感染がわかれば、エイズを発病することなく日常生活を送ることが可能になります。入院する必要もなく、1～3カ月毎の定期受診と必要に応じて内服治療をするだけで済ませることが可能になっています。

HIVに感染している場合には、放置するより、早期に発見し、うまく付き合っていくことで、仕事や家庭生活など、自らが大切にしたい人生を守ることが可能になります。

●どこに相談すればいいか

HIVに感染していることが分かり、この先どうしていいかわからないと不安になった時、受診しないといけないのだけれど、会社や家族に知られるのではないかと心配でたまらないときには、匿名で利用できる相談窓口があります。各地の拠点病院に窓口がありますが、下記のところにお電話いただければ、各地域の窓口をご紹介します。

HIVに感染していることを知って間もない時期、及び長期的にHIVとつきあいながら生活をしていく中で、医療ケアや福祉以外のサポートが必要となる時が来るかもしれません。そういう場合に利用できる関西の民間ベースのサポートを、大阪を中心に紹介します。以前は、感染がわかった人のための情報やサポートが医療機関以外にはほとんどないという状況がありましたが、大阪では陽性の人たちが自ら活動を開始したことをきっかけに、継続したサービスが年齢を問わず提供されるようになってきており、サポート体制が少しずつ整ってきています。

●電話相談

POSP（ほすぶ）電話相談

サポートプロジェクト関西（POSP）が提供するサービス。サポートプロジェクト関西（POSP）は、関西で生活するHIV陽性とわかった人たちが、日常のことや医療のことなどについて、いつでも相談でき安心してサポートを利用できる環境をつくることを目指して活動している団体。現在は、エイズ予防のための戦略研究MSM京阪神グループの一環として活動しています。POSP（ほすぶ）電話相談は、HIV陽性とわかった人のための電話相談で、HIV陽性の方であればどなたでも匿名で利用できます。電話をかけた方の番号は表示されません。HIV陽性の方の支援経験の豊富な相談員が、お話を聞き一緒に考えます。陽性とわかったときの経験、病院のこと、仕事のこと、家族・友人・パートナーのこと、恋愛・セックス、これからのこと、薬のことなど、普段生活している中で気になることを相談できます。他に相談する人がいない時、また誰に相談していいかわからない時にも利用できます。なお、友人やパートナー・家族など陽性者の周りの方も利用できます。

※相談日時：毎週水曜日（祝休）19～21時

☎06-6358-0638 www.posp.jp

●HIV陽性とわかって間もない人のための

グループプログラム

ひよっこクラブ

POSP（ほすぶ）電話相談と同じく、サポートプロジェクト関西（POSP）が提供するプログラム。HIV感染を知って6ヶ月以内の方のための全3回隔週で開かれる少人数制（4～6人）のグループミーティングです。3回参加できることと感染を知って間もない人であれば、年齢・性別・性的指向・既婚歴・国籍・感染経路の参加制限はなく、参加費は無料です。「ひよっこ」という名前には、年齢に関係なく「感染を知って間もない」という意味合いが込められています。同じ立場のひと同士が集い、個人情報を守られた安全な場所で情報や体験を共有しながら、これからの生活のよりよいスタートにつなげていくためのプログラムです。進行役にはHIV陽性の人もいて、交流や情報交換のお手伝いをします。安心して参加できるようにいくつかのルールを設けてあります。詳細はひよっこクラブ事務局☎050-3123-4608かhiyokko@posp.jpにお問い合わせください。このプログラムは、POSP（ほすぶ）電話相談と同様、サポートプロジェクト関西（POSP）によって運営されています。（HPはwww.posp.jp）

●陽性者による対面サービス

Followbox フォローボックス

HIV陽性の人たちによるプロジェクトFollowが提供するプログラム。Followには、お互いにフォローしあうという意味と、HIV陽性者（Ourselves）とその周りの人たち（Friends）をつなぎ合わせ（Linking）共に生きていく（Living）という意味が込められています。陽性者同士の集まりに行ってみたくてもたくさんの人の中に突然参加することに躊躇することもあるかもしれません。そんな時に同じ陽性者であるFollowメンバーが個別にお会いします。お申込みはbox@follow-web.comまで。

●陽性者による陽性者同士の集まり

HIVに感染していることがわかった場合、「他の人はどうしてるんやろ」と思うこともあるかもしれませんが。HIV陽性の知り合いがいない人や、誰にも話していない時期を過ごす人も少なくありません。そんな時、HIV陽性の人のみが集まる場で、同じ立場の人たちと話すことがヒントや力になるかもしれません。こうした集まりには、集まる人数の少ないものから比較的多いものまでいくつかあるため、自分に合うものを選んで参加できます。参加の申し込みをすると、陽性者であることの確認がなされます。

1st Meeting ファーストミーティング

Followが提供するプログラム。少人数の集まりで、陽性とわかってまもない方や他のFollowの集まりに参加したことがない方を主な対象としています。MSMのみのプログラムです。お申込みは1st@follow-web.comまで。

FRIENDSHIP Meeting フレンドシップミーティング

Followが提供するプログラム。陽性者同士で楽しみながら交流をする場です。同じような立場の人と出会い、情報や意見交換をしたり、新たな繋がりをつくるための会です。ゲイ・バイセクシャル男性のみのプログラムです。お申込みはfriend@follow-web.comまで。

POP Meeting ポップミーティング

Followが提供するプログラム。テーマごとにHIV関連の専門家を招いて開催する勉強会です。ゲイ・バイセクシャル男性のみのプログラムです。お申込みはpop@follow-web.comまで。

※mtg@follow-web.comに空メールを送信するとFollowが提供するプログラムの年間スケジュールが自動配信されます。問い合わせはinfo@posp.jpまで。HPはwww.follow-web.com

●多言語のサポート

多言語電話相談

NPO法人CHARMが大阪府・市の委託事業として提供しているサービスで、HIVや他の性感染症について相談できる5言語の電話相談です。CHARMは、すべての人が健康に暮らす社会を目指して、日本社会のシステムから孤立しがちな外国籍住民などのサポートを行っている団体。外国籍住民に理解のある医療者や必要な言語が話せる医師の紹介なども行っています。

電話番号：06-6354-5901

火曜16～20時：スペイン語、ポルトガル語、英語

水曜16～20時：タイ語

木曜16～20時：フィリピン語、英語

対面相談

CHARMが提供している、カウンセラーやソーシャルワーカーによる多言語相談。

医療通訳サービス

CHARMが提供しているサービス。病院や保健所に行く際の通訳者を派遣します。HIV検査や診療、結核検査や診療の分野で利用できます。利用者の個人負担はありません。スペイン語、ポルトガル語、タイ語、フィリピン語、英語などの通訳者を派遣します。CHARMへの問い合わせは、☎06-6354-5901、メールinfo@charmjapan.com、HPはwww.charmjapan.com

●その他のサポート情報は？

インターネットで情報を得ることができます（HIVマップ～HIV／エイズの総合情報サイト（www.hiv-map.net）。また、陽性者が登録してインターネット上などでつながることができるソーシャルネットワークサービス（SNS）もあります。

大阪地域のバー・アンケートにみるミドルエイジの特徴

—2009年のアンケート結果から—

MASH大阪では2009年、堂山・ミナミ・新世界のバー 88店舗にご協力いただき、アンケート調査を実施しました。1,300人を超えるMSM（男とセックスする男）の方に協力していただきました。ここでは特に40歳以上MSMに焦点をあててアンケート結果をご紹介します。全回答者1,354人の平均年齢は34.2歳。うち40歳以上のミドルエイジMSMは375人（全体の27.7%）でした。「過去6ヶ月間にゲイバーで、HIVやエイズについてお客さんやお店の人と話したことがありますか?」という質問について「ある」と回答した割合は、若年層（39歳以下）に比べて高く、46.1%でした。およそ2人に1人は話したことがあることになり、関心の高さがうかがえます。

●どんなセックスライフを送っているか?

—過去6ヶ月間のアナルセックスの状況—

ミドルエイジMSMのセックスライフについてみると、特徴的なのは以下の3点でした。ミドルエイジMSMは153人（対象者の23.4%）でした。

- ①ミドルエイジMSMにおける過去6ヶ月間のセックスの相手が彼氏や特定のセフレのみの方は47.8%、その場限りの相手のみの方は8.9%、その両方とセックスしたという人は43.3%。この傾向は他の年齢層とほぼ同じ。
- ②過去6ヶ月間にセックス相手が2人以上いた人の割合は、若年層（39歳以下）では72.2%、ミドルエイジは66.2%。
- ③セックス相手との出会いの場所は、ゲイバーや野外ハッテン場が多かった。（表1）

	39歳以下	40歳以上
1位	有料ハッテン場(35.9%)	ゲイバー(40.1%)
2位	出会い系サイト(34.4%)	有料ハッテン場(30.3%)
3位	ゲイバー(24.9%)	出会い系サイト(23.2%)
4位	ゲイナイト(3.0%)	野外ハッテン場(4.9%)
5位	野外ハッテン場(1.7%)	ゲイナイト(1.4%)

(表1)一番最近のアナルセックス相手と出会った場所

以上の結果からミドルエイジMSMは、セックスをしている人は若年層に比べてやや減少しますが、性行動そのものは若年層とあまり変わらないといえそうです。ただし出会いの場所は年齢層によって異なるということがみえてきました。

●過去6ヶ月間のコンドーム使用状況と所持状況について

コンドームを「いつも持っていた」人の割合は47.1%と若年層（39歳以下、38.5%）に比べ高く、ほぼ2人に1人がいつもコンドームを携帯しており、セーフターセックスへの意識が高いといえるかもしれません。一方、過去6ヶ月間のアナルセックス時に常にコンドームを使った人の割合は30.6%と、若年層（39歳以下、33.8%）に比べ低くなっています。Bさんのようにコンドームは避妊具だからという理由だけではなく、性感を損ねると感じる人もいて、毎回使っている人の割合はとても低いといえます。

●性感染症の既往歴

「これまで性感染症にかかったことがありますか」という質問に答えていただいた方の割合を年齢層別に示したのが表2です。性行為によって感染することが知られている8疾患についてしてみました。淋病・A型肝炎・アメーバ赤痢は、年齢が高くなるにつれ既往歴のある人の割合が高くなる傾向があります。

一方、梅毒・HIV感染症・B型肝炎・毛じらみは統計学的に25～39歳と40歳以上では差はみられませんでした。いずれにしても、HIV感染症をはじめとする性感染症は若い人だけの問題ではなく、40歳以上のMSMにとっても重要な健康課題となっています。

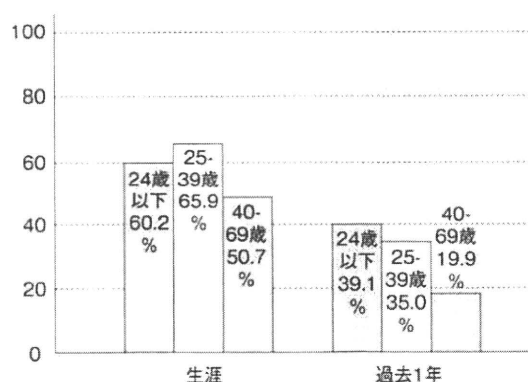
	24歳以下	25-39歳	40-69歳	合計
人数	161	508	282	951(人)
アメーバ赤痢	0.0	1.0	2.1	1.2(%)
淋病	5.6	8.9	12.1	9.3(%)
A型肝炎	0.0	0.8	0.7	0.6(%)
B型肝炎	4.3	6.3	6.0	5.9(%)
HIV感染症	2.5	4.5	4.6	4.2(%)
梅毒	5.6	13.4	14.5	12.4(%)
毛じらみ	17.4	32.5	37.9	31.5(%)
クラミジア	6.2	9.1	5.7	7.6(%)

(表2) 年齢層別の性感染症の既往歴

※これまでにコンドームを使わずにアナルセックスをしたことがあると回答した951人について分析

●どのくらいの人がHIV抗体検査を受検したことがあるか

これまでにコンドームを使わずにアナルセックスをしたことがある951人について、生涯および過去1年間のHIV抗体検査受検経験を図1に示しました。ミドルエイジMSMで受検したことがある人は若年層(39歳以下)に比べても低く、年齢が高い人ほど検査を受けない、もしくは受けたくないと思っている人が多いという傾向があります。



(図1) HIV抗体検査受検経験

●健康保険について

アンケートにご協力いただいた1,354人のうち、何らかの健康保険を持っている人がほとんどでしたが、持っていない人も年齢層に関わらず約3%いることがわかりました。そして健康保険を持っていない人は、持っている人に比べてHIV抗体検査を受検していない傾向のあることがわかっています。

おわりに

—関西地域ミドルエイジMSMの状況のまとめ—

●自分でコントロールできる範囲

ミドルエイジMSM（男とセックスする男）が性的健康を維持していくには、アナルセックスが性行為感染症に感染しやすい行為であること、MSMの性的ネットワークが一般集団のそれと比べてはるかに濃密になっていること、この二つの現実に向き合うことが必要です。向き合うためには、正確でリアルティのある情報提供が必要ですが、これまでの予防啓発は主に若年層に向けて行われてきており、ミドルエイジの人たちへの情報提供は十分ではありませんでした。

そのため、ミドルエイジMSMはエイズへの関心が高く、コンドーム携帯率も高いにもかかわらず、抗体検査の受検率やコンドーム常用率が低いなど、予防行動に不十分な点が見られます。またそれゆえに、関西のミドルエイジMSMの中には、すでに感染しているのだけれど、そのことに気付いていない人がたくさんいることがわかってきています。この人たちが一日も早く検査につながり、医療・福祉につながることを望まれます。

エイズという病気の影響を自分でコントロールできる範囲にとどめておくためには、早くHIV感染の事実を知り、早く治療を受けるほかありません。エイズと総称される日和見感染症のどれかを発病すると、Aさんのように、比較的軽く済む場合と、Bさんのように深刻な後遺症を抱える場合があります。Bさんの場合には、もはや自分でコントロールできる範囲を越えています。そうなると、医療制度・福祉制度の利用だけでは生活が立ち行かなくなることがあります。Bさんのように親きょうだいの援助を仰ぐこともありますし、場合によってはパートナー、友人、民間サポート団体などからの支援を受けつつ、あらたな生活をつくっていくこととなります。

感染がわかった場合、我が国では世界的にみて最も高い水準の医療や福祉のサービスを受けることができます。またこうしたサービスを受けるうえ

で、MSMであることは特に不利であるとか有利であるとかということはありません。ただ、「MSMであることの言いづらさ」が、「医療サービスの受けにくさ」「福祉制度の利用しにくさ」や「家族とのコミュニケーションのとりにくさ」と心理的につながっていることはあるかもしれません。

おわりに

インターネット社会の到来とハッテン場文化の定着によって、我が国の、そして関西地域のMSMは大きな性的自由を獲得しています。このこと自体は喜ばしいことですが、性的自由は性的ネットワークが濃密になる事態を招き、結果としてMSM集団の性的健康の低下をもたらしています。現時点では、関西のMSM集団に占めるHIV陽性の人の割合は5%前後だと思われませんが、すでにオーストラリアのシドニーでは15%、タイのバンコクでは28%、アメリカ合衆国の黒人MSMの間では約32%にのぼっています。私たち関西のMSM集団の性的健康を増進していくためには、ネットワーク上を病原体が巡ることを最小化することで、集団全体の病原体の量を減らすことが必要になります。そのためにやるべきことはこれまでに書いた通りです。

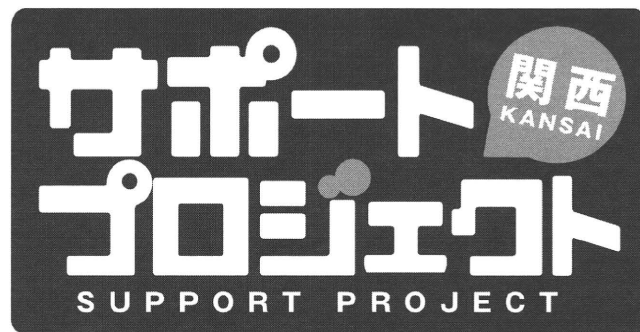
しかしAさんの例にみられるように、関西のMSMの多くの人たちは、性的健康を増進するための情報を十分に持っていないことがわかってきました。このガイドブックがそうした状況を少しでも改善するのに役立つことができれば幸いです。

この小冊子に関するご意見・ご要望・ご叱責などがありましたら、
FAXまたはEメールにてMASH大阪事務局（↓）までお寄せ下さい。

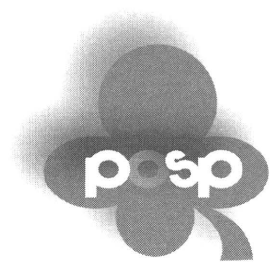
MASHOSAKA

〒530-0027 大阪市北区堂山町17-5 巽ビル4階
☎06-6361-9300 office@mash-osaka.com

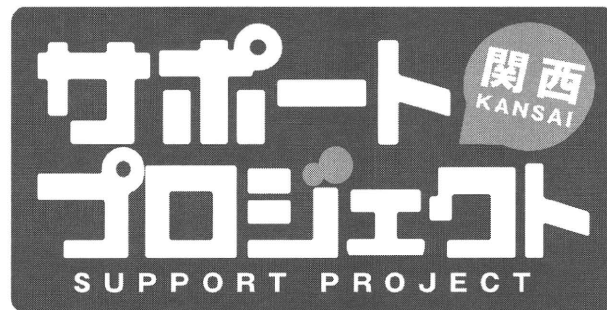
2010 年度



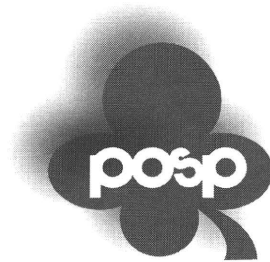
活動報告書



2010 年度



活動報告書



はじめに	2
今年度の POSP の活動	3
POSP 電話相談	4
ひよっこクラブ	6
POSP の広報について	8
おわりに	10
サポートプロジェクト関西 HISTORY	11



はじめに



厚生労働省科学特別研究事業エイズ予防のための戦略研究
MSM 京阪神グループ（研究リーダー：市川誠一）の一環として、
関西における支援・相談環境を整備するチームが位置づけられました。
活動をしていくにあたって「陽性者サポートプロジェクト関西（POSP）」
を組織して早 4 年が経ち、戦略研究の期間終了も目前となりました。
POSP は、関西で生活する HIV 陽性とわかった人たちが日常のことや医療のこと
などについて、いつでも相談でき、安心してサポートを利用できる環境をつくる
ことを目標に活動してきました。戦略研究 MSM 京阪神グループとしては、
支援・相談体制が整備されてくるとともに、MSM が利用できる
検査機関の開拓がなされ、そこで感染を知った方への支援プログラム
案内も可能になり、受検機会広報の活動も積極的に進められてきました。

最終年度である 2010 年度の
POSP 活動報告をここにお届けいたします。

■ 今年度の POSP の活動

2010 年度も、「POSP 電話相談」と「ひよっこクラブ」を引き続き実施した。両プログラムとも、これまでの立ち上げおよび試行時期を経て定着時期に入っており、今後の継続を念頭におきながら活動した。2007 年 10 月に開始した「陽性者サポートライン関西」は名称を「POSP 電話相談」に変更したり、対象を HIV 陽性とわかって間もない人から HIV 陽性の人全般とパートナーに拡大するといった変化を経ながら、週に 1 度の電話相談を実施してきた。研修システムを構築してオンジョブトレーニングを実施し、人材増員に取り組むことで、安定したプログラム実施を目指した。開始当初は 2 名だった相談員が、2010 年度は 4 名+研修者 1 名となり、2 月から 5 名体制で相談を担っている。毎月ケースカンファレンスを開催し、相談対応の向上に努めている。2011 年 2 月末までに 109 件の相談があった。

HIV 陽性とわかって間もない人のためのグループミーティングである「ひよっこクラブ」は、1 年を超えるプログラム準備期間を経て 2009 年 8 月に第 1 期を開始した。現在 5 期の実施中で、これまでの参加者は合計 22 名となった。初めて土曜日夜の実施を決めた第 5 期には定員 6 名以上の参加申し込みがあり、早急に第 6 期の実施を予定した。安定してプログラムを実施していくために、各期を担当するサポーターの増員にも取り組んでおり、每期後の振り返りミーティングはサポーター候補者を含め全スタッフにとっての学びの場でもある。これらのプログラムについて、陽性の人に情報が届くように、近畿の全拠点病院、全保健所・保健センター等にフライヤーなどの資材を配布してきた。大阪府立公衆衛生研究所の協力により、確認検査結果用紙とともにフライヤーを同

封してもらうことで、陽性とわかってすぐに情報を得やすい環境ができてきている。また、陽性とわかる前や検査に行く前の人にも陽性の人のためのサービスが存在することを知らせてもらうことが大切であるため、MASH 大阪の協力にてフライヤーを配布するとともに、コミュニティペーパーへの掲載をしてもらっている。毎年秋に開催されてきた PLuS+においても、陽性の人のためのサービスの存在の周知を目指して、follow や CHARM と共同で「なにわサポートネット」としてブースを出展した。

地域の支援者ネットワーク構築を目指して 2008 年度、2009 年度に年数回開催してきた「カンファレンス」は、多様な立場で陽性の人に関わる方々にご参加いただき、情報交換や横のつながり構築の場としての必要性が認識された。本年度は、他の機関が主体となった継続開催を期待し、POSP 主催での実施をしないこととした。その結果、関西 HIV 臨床カンファレンスが年に一度の講演会にて、ネットワーク構築の主旨を組み込んだ会を継続開催することが決定した。すでに 2011 年 1 月に関西 HIV 臨床カンファレンス会員以外の方にも案内を拡大した会が開催された。

どこで陽性とわかって、包括的な情報を提供し、必要な場合に相談先を見つけやすくするために、大阪府内で共通して使用できる、主に陽性結果通知時に使用する冊子制作への働きかけや協力をしてきた。東京都が発行している冊子「たんぼぼ」を、大阪府、大阪市、堺市、東大阪市、高槻市が協働で発行することが決定し、本年度中に発行される予定である（お楽しみに☆）。また、陽性の人々の地域生活を多面的に連携して支えるために、自治体の保健師研修会などへの協力も積極的に行った。

（報告 岳中 美江）

■ 電話相談の概要

2007年10月からHIV陽性とわかって間もない人を対象に、毎週水曜日19時～21時の間に実施をしてきた。

2009年6月に対象者の見直しを検討し、10月からHIV陽性とわかった人・陽性者の周りの人（家族・パートナー）を対象とした。また、名称も陽性者サポートライン関西から、POSP 電話相談へと変更した。

電話相談の目的としては、①話しにくい、話す場所がない、どこに話したらいいかわからない人に相談機会を提供する②アセスメントをし、気持と環境部分を整理しながら、本人選択を支援する③情報提供を行い、選択肢の幅を広げる④受診を支援する⑤医療や行政へのクレームを受ける⑥検査環境への利用者評価情報の収集をすることである。

相談員間のケースの共有等を目的に、2009年4月から月1回のケースカンファレンスを実施し、運営面について必要事項の検討・前月の相談ケースの共有と検討を行っている。

電話相談の基本姿勢としては、①基本的に単回の相談とする②担当制はとらない③継続的な支援が必要な場合は、利用可能な資源について情報提供をする④感染不安など、対象者外の相談の場合、内容を聞いていったん受け止めてから、適切なサービス先を紹介することである。また、電話相談に寄せられた相談内容や利用者の傾向について相談記録から把握している。相談者から了解を得たケースについては、聞き取った内容について、陽性者支援や検査相談関係者に事例検討などの場で

報告している。

また、相談員の研修も行い相談員の数を増やしていくことにも取り組んでいる。その研修プロセスは、①オリエンテーションをうける②ケースカンファレンスに参加する③実際の電話相談対応を見学する④ロールプレイをする⑤スーパーバイザー同席で電話相談に対応する⑥スーパーバイザーが、候補者一人で対応できると判断すれば、ケースカンファレンスの場で他相談員に報告し、了承が得られれば相談員となる。現在5名の相談員で相談を担っている。

■ 2010年度の実施状況詳細

2010年4月1日から2011年1月末までの電話件数は28件である。その内訳は、陽性者1件・スクリーニング陽性1件・陽性者のパートナーや家族4件・その他（感染不安等）15件である。

陽性者の居住地の割合は、大阪2人・兵庫3人・京都0人・関西外2人・無回答1人であった。

電話相談を知った情報源としては、陽性者本人はWEBと紙資材2件・WEB4件・口コミ1件・他1件であった。スクリーニング陽性本人はWEB1件、パートナー・家族はWEB3件であった。

陽性者の年齢割合は、20代：0人・30代：6人・40代：1人・50代：0人・不明1人であり、セクシャリティは、MSM1人・その他2人・不明5人であった。陽性とわかった場所は、医療機関4人・保健所2人・不明2人であった。

■一年を振り返って・今後の課題

陽性者からの電話相談の件数は前年度に比べて増えていないが、感染不安の電話相談は増えている。地域別でみると、関西以外からの電話相談も増えている。

相談件数が増えていない理由については、陽性が解った場面や初診時において、医師・看護師・カウンセラー・医療ソーシャルワーカーなどの専門職種の介入があり、相談していく中で不安要素が軽減されているケース、インターネット検索により HIV の知識を得ているケースや、HIV の事を相談できる人や陽性者が周りにいるため、電話相談を必要としない陽性者が増えているのではないかと考えられる。

一方、インターネットを利用しないため情報を得にくい人（高年齢層の陽性者など）や、相談できる場がない人、医療的には安定をしているため年に数回しか病院にいかない人、もしくは病院では相談しにくい人などには、電話相談という機会が必要な可能性は高いと考える。そのためこのような層に周知することが今後の課題である。

また、陽性者のパートナーや家族がクリニックや検査場で、HIV 検査を受ける際に、相談をすることがあり、陽性者が通院する病院には相談しにくい様子が見え、相談機会も限られている。当電話相談では、陽性者だけでなくパートナー・家族など周囲の人も対象としており、その事を知ってもらう事が大切である。

電話相談の利用に関しては、今のような週 1

回 2 時間の限られた枠よりは、思い立った時にいつでも電話ができるような体制が、利用しやすさにつなげるためには必要である。そのためにも相談員の募集・研修を実施し、新しい相談員の確保が大切である。

（報告 平島 園子）

1 広報のこれまで

陽性者サポートプロジェクト関西（以下、POSP）では、2009年7月より、広報全体のリニューアル作業に取り組んできた。立ち上げ当初より実施しているPOSPのプログラムは、HIV陽性とわかって間もないひとのための電話相談「陽性者サポートライン関西」と、地域の支援や相談に係る専門職を対象とした「カンファレンス」がある。これら二つのプログラム広報は、電話相談の周知を主な目的とし、ホームページとフライヤーの制作が行われてきた。広報のリニューアルは上記に加えて、2009年8月よりHIV陽性とわかって間もないひとのためのグループミーティング「ひよっこクラブ」の活動開始に合わせて行われることとなった。

目的は、POSP全体の視覚的イメージを一新し、プロジェクト全体を通して統一感を出すこと、組織についての説明、理念、目標をよりわかりやすく整理し、それらを利用者に対して正確に伝えることであった。リニューアルプロジェクトの開始にあたって、最初に取り組んだ作業は、フライヤーの制作である。ホームページのリニューアルを先に行うべきではないかという意見もあったが、まずは、伝えたいイメージや言葉を引き出し、整理された情報を紙へ落としこむ作業、フライヤーをつくることを優先した。完成したフライヤーを元に次のステップとして、ホームページのリニューアルに取り掛かる計画を立てた。2009年7月より、広報チームと各プログラムスタッフとの間で意見交換を行い、キャラクターを作り、イメージカラーを選び、言葉づかいを揃えるなどの作業をていねいに行った。そして、2009年10月に広報の基本となる「POSP活動案内」と「ひよっこクラブフライヤー」二つの紙媒体が完成した。

2 テーマとしたこと

1) プロジェクトに興味を持ってもらうきっかけになるような、ポップでキャッチーな「キャラクター」をつくる。

・キャラクターについて

POSPのロゴマークには四つ葉のクローバーを、ひよっこクラブには参加者の多様性を表した様々なひよこたちを、電話相談には受話器を持ったやさしいライオンを描いた。全ての絵をならべて見たときに、一冊の絵本のようなつながりを感じられるように、イメージを膨らませながらデザインを行った。

2) 安心感を得てもらえるような、「色づかい」「言葉づかい」に配慮をすること。

・色づかいについて

色づかいは暖色系を中心とし、やさしさや柔らかさ、自然を伝える3色を選んだ。文字にも黒は使用しないことにした。

[太陽の光＝橙色や黄色][土＝赤みのある茶色]
[木や芝生＝明るい緑色]

・言葉づかいについて

POSPでは、各プログラムの対象となる人「HIV陽性者」を表す言葉として「陽性者」とは使わず、「HIV陽性のひと」とすることになっている。理由は、「・・・者」とするよりも「・・・のひと」とした方がやさしく柔らかなイメージを受けるのではないかという、利用者へ向けた配慮にある。また、プロジェクトの正式名称である「陽性者サポートプロジェクト関西」についても、広報で使う場合に限り、呼びやすさを考慮し、「POsitive Support Project」の略称となる「POSP（ぽすぷ）」とすることにした。それに合わせて電話相談の名称も「POSP電話相談」に変更をした。

3 ホームページのリニューアル

2010年度の目標は、ホームページのリニューアルを急ぐこと、情報の行き届いていない対象者に対し、インターネットを用いた更なる周知活動を行うことである。リニューアルにあたって、各プログラムの特性を生かしたアイデアを取り入れるために、プログラム毎に担当者を決め、リニューアルのための広報チームを結成した。ミーティングの中で出された意見の集約はコーディネーターが行い、構築はホームページ制作会社に依頼した。広報ミーティングでは、以下のようなアイデアが出された。①トップページは、直感的で欲しい情報へアクセスしやすいレイアウトにしたい。②電話相談のページでは、相談の実施日時を大きな文字で表示し、ページの中で目立つ位置にレイアウトしたい。③ひよっこクラブのページでは、対象がHIV陽性とわかって間もないひとであることや、3回を1クールとして開催するプログラムであることを強調したい。④リンクページでは、関西に限らず全国の情報を掲載し、相互リンクの依頼をすること。⑤活動に対する意見や感想を受け付ける「ご意見箱」を設置したい。⑥ポップでやさしい印象を与えるようなデザインを心がけたい。

以上のことに配慮をしながら、急ピッチで制作を行った。携帯版を含むホームページは、2010年5月に仮アップを行い、リンクなど全てのページが完成したのは、その4カ月後2010年9月である。

4 リニューアルを終えて・今後の課題

新しいホームページが完成し、半年が経過した。ここで、リニューアル前と後のアクセス数や直帰率の変化を調べたところ、ほぼ同等

の値を示していることがわかった。現在のところホームページのリニューアルをしたことで、大きな成果を上げたとは言い難い状況であるが、HIVをテーマとしたイベントやエイズ学会において、QRコードのついたフライヤーを配布した直後には、携帯版ホームページのアクセス数が顕著に上がっていることがわかった。また、新たな試みとして、HIV陽性者専用のSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）の中で「ひよっこクラブ」「POSP電話相談」の実施スケジュールを定期的に掲載し、対象者へ直接情報が届くように工夫をしている。

インターネットを用いた広報の今後の課題は携帯版ホームページの宣伝により力を入れること、PC版ホームページでは、何度も見たくなるようなページづくりを意識し、スタッフ日記やトピックスを掲載するコーナーを作るなど、動きのあるホームページへと更新して行く必要があると考えている。

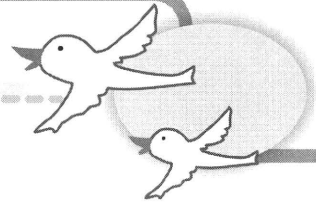
5 おわりに

広報全体を通して課題としてきたことは、HIV陽性の方が、いろいろな場所や、いろいろな人からPOSPの情報を得て、見た人の記憶に残る「知っている」活動として覚えておいてもらう。そして、その人が支援を必要とした時には「知っている」という信頼と安心感を持って、POSPのプログラムにアクセスしてきてもらう。そんな環境を整えておくことであった。

プロジェクト開始当初より、広報活動にご協力をいただいた、関西の拠点病院、保健所、大阪府立公衆衛生研究所、MASH大阪、関係諸団体のみなさまに、心より御礼を申し上げます。

（報告 伊達 直弘）

おわりに

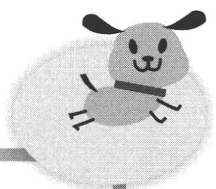


戦略研究の終了にともない「陽性者サポートプロジェクト関西」は発展的解散をいたします。関西地域で活用されることを目指して構築してきた電話相談とひよっこクラブは今後も継続します。これまで場所の提供等のご協力をいただいていた NPO 法人 CHARM において、陽性者支援サービスの一部として活動していきます。地域の現状や利用者のニーズに即したプログラム実施のために、戦略研究期間中の経験を活かしつつ、両プログラムとも引き続き改善をしながら継続していきたいと、思いを新たにしています。

戦略研究の開始から現在まで、プログラム構築から実施、また POSP 運営や事務局運営をともにしてきたスタッフのみなさんに深謝いたします。また、ひよっこクラブの「紹介者」となってくださった方々をはじめ、医療機関、自治体、保健所・保健センター、NPO 等の方々など、利用者への案内にお力添えいただいた方々、イベント参加等に一緒に取り組んだ方々、プログラム継続を応援してくださった方々にお礼申し上げます。

今後ともみなさんとのつながりを大切にしながら、HIV とともに生活する人が自分らしく暮らしやすい地域にするための一助となれるよう活動していきたいと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。

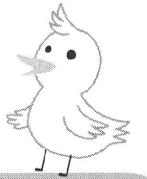
岳中 美江



サポートプロジェクト HISTORY

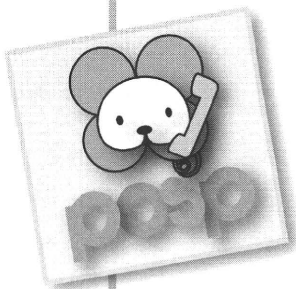
2007年1月

戦略研究 MSM 京阪神グループ支援・相談体制チーム会議スタート。
名称を「陽性者サポートプロジェクト関西」とする。



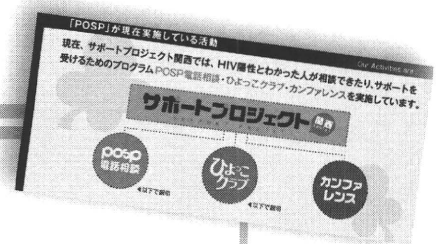
2007年10月

HIV 陽性とわかって
間もない人のための電話相談
「陽性者サポートライン関西」スタート。



2009年7月

電話相談の名称を変更。
HIV 陽性とわかったひとのための
電話相談「POSP 電話相談」とする。



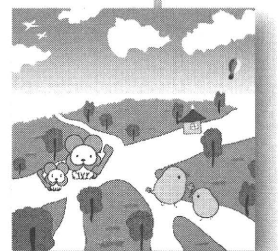
2009年8月

ポジティブとわかって間もないひとのための
グループミーティング
「ひよっこクラブ」スタート。



2010年3月

戦略研究の終了にともない「陽性者サポートプロジェクト関西」は
発展的解散をする。関西地域で活用されることを目指して
「電話相談」と「ひよっこクラブ」は今後も活動を継続して行く。



2010 年度
陽性者サポートプロジェクト関西
活動報告書

発行日 2011 年 3 月 10 日
発行 陽性者サポートプロジェクト関西
〒530-0031 大阪市北区菅栄町 10-19 NPO 法人チャーム 内
TEL 050-3123-4608

©陽性者サポートプロジェクト関西 (POSP) 無断転載を禁ず

